

(別紙1)

## 論文の内容の要旨

論文題目 『中国新石器時代の生業と文化』

氏名 甲元眞之

本書は従来の中国新石器時代の研究においてこれまでとかく等閑にされてきていた動・植物遺存体の分析を通して、黄河流域と長江流域に展開した新石器時代の生業形態を具体的に把握し、黄河流域の畑作栽培地帯と長江流域の稲作栽培地帯での生業活動の異なり、社会組織や文化の相違に論及したものである。

序文では先史学研究の歴史を瞥見し、先史学研究においては民族誌との比較研究が必要であり、文献史料も「民族誌」として活用するという著者の基本的立脚点を明らかにした。

第1章「東アジアにおける農耕起源と拡散」では稲作栽培の起源論を中心として、穀物栽培の分布上での年代的広がりとその意味について論じた。最近の稲のDNA分析により、野生種の段階で一年草のインディカ種と多年草のジャポニカ種が存在することが判明したことを受けて、新石器時代の稲粒の長幅比を比較し、現存する野生ジャポニカから直接栽培ジャポニカに変化していったことを明らかにした。ヤンガー・ドライアス期の急激な環境変化により多年草ジャポニカの一部が一年草に変質し、後氷期の四季の明確化という生育期間の減少は胚乳の肥大化を招き、後期旧石器時代以来の水辺での食料資源の積極的獲得活動を行っていた人間に着目されることで栽培が始まったことを論じた。

第2章から第6章までは新石器時代の遺跡から検出された動・植物遺存体を集成し、そ

れを基に栽培、採集、狩猟と家畜飼育、貝の採取、漁撈などの生業活動の実態を分析した。

第2章「新石器時代の栽培穀物」では、穀物出土遺跡の時空的広がりを把握し、稲作地帯ではイネが単独に栽培され、畑作地帯では各種の穀物が栽培されていたこと、休耕作物として必須のマメ科植物の栽培化が未だなされていないことなどを指摘して、イネが南北に栽培分布域を拡大することは、連作が可能なイネの特徴と生産性の高さから齎されたイネのもつ食料源としての優位性に起因することを論じた。

第3章「新石器時代の植物遺存体」では、堅果類は中国各地からほぼ検出されるのに対して、ヒシやハスなどの水辺植物は稲作地帯に多いことを明らかにし、稲作栽培が行われた遺跡の生態環境が河川や湖沼などの水辺であったことを花粉分析の結果から導き出し、稲作栽培が水辺での多角的な生業活動の一環であったことを論じた。

第4章「新石器時代の狩猟動物と家畜」では、狩猟により捕獲された哺乳動物の個体数を算出し、広範囲にわたる種の捕獲から、シカ科を中心とし中型獣に狩猟対象が収斂して行くことを指摘し、さらに狩猟動物と家畜であるブタの個体と実際得られる狩猟動物の肉量の比較検討を行い、黄河中流域の龍山文化期の住民以外は家畜飼育に依存する度合いが低かったことを明らかにした。龍山文化期では家畜を使用したト骨が盛んとなり、黄河流域の家畜飼育は、祭儀活動の一環として家畜飼育が営まれた可能性を示唆した。また稲作栽培地帯では時期が下るとともにブタ飼育の割合が低下し、逆にシカ科の選別的狩猟が卓越することは、越冬用飼料確保の面での家畜飼育の非有効性から齎されるものであり、稲作栽培地帯では動物性蛋白質は狩猟動物や魚類に依存する度合いの高いことを明確にした。

第5章「新石器時代の貝の採取活動」では、淡水産貝の捕獲は黄河や淮河流域の畑作栽培地帯で得に多くみられ、貝を素材とした各種の製品もこの地域に集中することを指摘した。また特殊な埋葬儀礼や装飾品に海産の貝が使用される事例を取り上げ、黄河流域や淮河流域では新石器時代の初頭段階から広域的な交流が看取されることから、畑作栽培地帯の広域的なつながりを明らかにした。

第6章「先史時代の漁撈活動」では、内陸地帯の漁撈に使用された漁具と遺跡出土の魚骨（爬虫類の一部を含む）の集成を行い、具体的な漁撈活動の復元に努めた。網具はそれに使用される錘の違いにより、刺網と投網に分けられ、うち投網は淮河下流域から長江下流域の稲作栽培地帯で発明され、稲作栽培の拡大とともに分布域を広げたことを把握して、稲作と河川漁撈の結びつきの強さを論証し、稲作栽培地帯においてはコイ科の魚類が多く捕獲されたことを出土魚骨の分析から明らかにした。さらに魚類と獣類から得られるエネルギー量から、家畜を飼育するよりも魚を捕獲することの経済的優位性を指摘し、稲作栽培地帯における家畜に対する依存度の低さの原因の一つをこれに求めた。

以上の各章において稲作栽培が水辺での生態的環境に最も適応した経済類型であり、イネ、シカ狩猟、魚捕獲といった選別的経済戦略、畑作栽培地帯では多種の穀物、多種の家畜飼育などの多角的経済戦略と異なった営みが展開したことを論じた。

第7章と8章では畑作栽培地帯と稲作栽培地帯での社会構成の違いを論じた。第7章で

は関中地区を取り上げ、集落と墓地の分析から、新石器時代当初には双系双分制の社会構造をなしているが、その中に一部の人々を特殊的に扱う現象が見られ、これが特定集団の系譜的つながりを強調する方向へ展開し、父系を強調する社会に進展したことを論じた。

第8章では稲作栽培地帯の劉林遺跡を分析の対象とし、双系的社会構造をなしていたことを明らかにした後に、特定の子供に生得的財産を付与することに社会的階層化の兆しが認められることを指摘して、新石器時代中期の墓域を異にし、副葬品の集中化で示される階層化した集団の出現過程に言及した。新石器時代初期の平等的な社会から、社会分化が生じる素因が畑作栽培地帯と稲作栽培地帯では異なり、畑作栽培地帯での階層分化が早く進展したことを二つの論文では示した。

第9章と第10章では黄河流域と長江流域では死者に対する観念の違いを論じた。第9章「魚と再生—先史時代の葬送観念」では、仰韶文化の土器に表された魚紋や瓢箪形土器を手懸りとして、これらが特定の子供あるいは女性の墓に副葬品として扱われること、魚の骨が女性の墓に随葬される事例が多いことから、これらが特殊な観念の下に営まれたことを指摘した。次いで文献に記載された伝承や民族誌の事例から、魚が「再生」を祈願する習俗と結びつくものであり、上記した考古学的事実と相応することから、黄河流域に生活した仰韶文化期の人々の間では「再生の観念」が存在したことを論じた。

第10章「先史時代の『牙』副葬墓」では、墓に副葬された動物の牙を対象として分析を行った。動物の牙を副葬する事例は先史時代中国の各地に断片的に見られるが、中国東海岸一帯では、キバノロの牙やそれを組み合わせて拵えた獠牙器を手に握らせたり、首に吊り下げたりする習俗が卓越して認められる。これらは民族誌の事例から「死者の魂の擁護」がその目的であったことを推定し、「再生の思想」の表し方において、黄河上流地域と淮河下流域では異なりがあることを論じた。

第11章「先史時代の抜歯習俗」では、稲作栽培地帯に多く認められる抜歯習俗を取り扱った。先史時代中国の抜歯が施された人骨の事例を集成し、所属時期と抜歯様式を分析した。その結果、抜歯習俗は長江下流域の新石器時代中期に、上顎左右いずれかの門歯及び側切歯を抜去することから始まり、次第に下顎の門歯または側切歯や犬歯も抜去することへ変化したことを跡付けた。ついで中国において抜歯習俗を記録した文献を跋渉し、文献の記載上で認められる抜歯の意味変化の推移を年代的に把握し、抜歯は婚姻もしくは成人の証として施される事例が古いことから、左右いずれかの門歯あるいは側切歯が抜去されるという様式は、出自の表現として開始されたものであり、これは特定の家系よりも集団を強調する平等社会に適合的な習俗であることを論じた。

第12章「顎倫春族の生業暦」は、民族誌に見られる狩猟、漁撈、採集活動が社会的単位では生業暦にどのように反映されるかを検討した。考古学的な資料だけでは生業活動相互の関連が明確には把握しにくいために、先史時代と同一レベルにあると想定される民族誌の季節による労働比重のかけかたの違いを分析することで、先史時代人の季節や労働対象による営みの違いを明らかにすることを目的とした論文である。顎倫春族の事例では、

夏季以外の季節では狩猟、漁撈、採集活動が相互に密接に組み込まれているが、夏季には食料資源の枯渇から生業活動が特定されにくい。夏季に収穫する穀物の栽培が導入されたとすると、通年的に集団活動が営まれることとなり、食料を補充する程度の初期農耕段階では、却って従来の社会集団を結束させる方向に向かう可能性を論じた。

第13章「中国新石器時代の生業と文化」では、本書のまとめとして稲作栽培地帯と畑作栽培地帯での生業活動や社会・文化の面での大きな相違について論じた。穀物栽培と家畜飼育は相反する生業上での行為であり、穀物栽培が不十分な地域で二次的選択として家畜飼育が営まれたことを明らかにし、稲作栽培が水辺での生態的環境を最も有効に取り込んだ生業であったことを指摘した。イネの栽培、魚の捕獲、シカ科の狩猟という選別的な経済類型は、こうした豊かな生態的環境の下で形成されたのであり、畑作栽培地帯では穀物栽培の連作が不可能なために、多種の穀物、多種の狩猟と多種の家畜飼育という多角的な経済類型が展開したのであり、新石器時代の長江と黄河流域では異なった社会生活が営まれていたと結論付けた。